

親の関わりかけと自閉スペクトラム症児の社会的相互作用の特徴 —注意共有方略と motionese に着目して—

田崎 榛菜

【背景・目的】

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorders; 以下、ASD) 児の発達において養育者などの大人からの関わりかけが重要な役割を果たすことが明らかにされており (Hancock & Kaiser, 2002; Siller & Sigman, 2002; Mahoney & Perales, 2003)、母親だけでなく他の大人との関係の形成が ASD 児の他者理解の発達の基礎となることも指摘されているが (別府, 2003)、ASD 児では、その障害特性から、大人の関わりかけに対して反応が得られにくいと考えられる (Doussard-Roosevelt, Joe, Bazhenova & Porges, 2003; 狗巻, 2013)。一方で、ASD 児を含む児の注意を引きやすい行動として母親の motionese (Brand et al., 2002) が挙げられる。motionese が ASD 児の反応を引き出しやすい可能性が示唆されているものの (Shizawa et al. 2012)、ASD 児に対する motionese の有効性に関して検討した研究はまだ少ない。そこで本研究では、個別療育の母子遊び場面および自由遊び場面において、母親の関わりかけとそれに対する児の反応を詳細に分析すること、明示的手がかりに含まれる motionese という視点から、ASD 児が反応しやすい物を用いた関わりかけを評価し、母親の motionese と児の反応との関連を検討すること、さらに、母親の関わりかけが、児の他の大人との社会的相互作用とどのように関連しているのかについて検討することを目的とした。

【研究 I : 自閉スペクトラム症児・定型発達児とその母親の母子遊び場面における行動】

研究 I の協力者は、個別療育に参加した ASD 児とその母親 11 組、また対照群として研究に参加した定型発達児とその母親 8 組であった。ASD 群に関しては、週 1 回行われる個別療育の母子遊び場面 5 分～9 分間の映像記録を再生しながら、ASD 児 1 名につき療育の最初 3 セッション分の母子遊び場면을観察した。観察内容は、母親の関わりかけとそれに対する児の反応であった。各カテゴリの行動の 30 分あたりの生起頻度を算出して用いた。

分析の結果、ASD 児の母親は自由遊びの中で児の注意の方向や対象に即した関わりかけを頻繁に行っているが、定型発達児の母親と比べると、児の注意を別の物や方向に向けさせようと関わりかける割合が比較的高いことが分かった。また ASD 児の母親は言葉で児の注意の方向を変えさせるように関わりかける際、定型発達児の母親に比べてより指示を多く用いるということも分かった。一方で定型発達児の母親と比較して ASD 児の母親がより児を褒めたり励ましたりすることが多いという結果も得られた。さらに motionese と関連する結果として、ASD 児の母親の方が定型発達児の母親よりも、児の注意の方向や対象に沿って motionese 特性の評価点が高い関わりかけを行っていることが明らかになった。また、ASD 児の注意の方向を大人が変えさせようと関わりかけるよりは、児の注意の方向や対象に寄り添う形で関わりかけた方が、児が拒否を示すことが少ないということが明らかになった。さらに、身体接触や物を用いた関わりかけが ASD 児に受容されやすいという結果も得られたことから、児の注意の方向や対象に沿う形で関わりかけるだけでは児の受容反応を引き出すことが難しいが、身体接触や物の操作と組み合わせることで ASD 児の受容反応をより引き出すことができる可能性が示された。

【研究 II : 自閉スペクトラム症児の母親と療育スタッフの行動、それに対する児の反応の関連】

研究 II の協力者は、研究 I に参加した ASD 児とその母親 11 組、また児にとって慣れない大人である療育スタッフであった。母親の関わりかけとそれに対する児の反応に関しては、療育内で実施される母子

遊び場面 5 分～9 分間の映像記録を再生しながら観察を行った。ASD 児 1 名につき療育の最初 3 セッション分の母子遊び場면을観察した。また、スタッフの関わりかけとそれに対する児の反応に関しては、療育内で実施される自由遊び場面の冒頭 9 分間の映像記録を再生しながら観察を行った。観察内容は、大人の関わりかけとそれに対する児の反応であった。各カテゴリの行動の 30 分あたりの生起頻度を算出して用いた。

療育スタッフの motionese 特性の評価点と、ASD 児の母親が母子遊び場面で行った関わりかけにおける motionese 特性の評価点との間には差がなかった。また、スタッフの関わりかけにおいて motionese 特性の評価点が高い場合と低い場合で、児の反応に差が見られなかった。motionese が児の注意を引きやすいという特徴を持つことは、先行研究においても示されているが、ASD 児を対象とした本研究において、その特徴は母親の関わりかけに限られるということが明らかになった。一方で、母親の motionese 特性の評価点が高い児ほど、スタッフからの motionese 特性点の高い関わりかけを受容する割合が高いという結果が得られた。母親から motionese 特性の評価点が高い関わりかけをよく受けている児は motionese への応答性が高まっており、スタッフからの motionese 特性の評価点が高い関わりかけを受容しやすかった可能性がある。

【総合考察】

本研究では ASD 児の母親が定型発達児の母親比べ、児の注意の方向を変えさせるような関わりかけや指示的な関わりかけを行うことが多いと分かった。一方で ASD 児が反応を示しやすい物を用いた関わりかけを行う際には、児の視線を確認することがより多く、児の行動や反応を観察しながら児との相互作用を展開していることも明らかとなった。母親が用いる motionese を得点化した motionese 特性の評価点に関しては、ASD 児の母親は定型発達児の母親よりも高く、さらに定型発達児の中でもより生活年齢が低い児の母親の方が高いということが分かった。児の注意を引き、児との相互作用を開始、継続させるために母親がより多くの motionese を用いている可能性が示唆された。また、ASD 児においてはそのような motionese の特性の評価点が高い関わりかけほど児に無視されにくいということが明らかになり、ASD 児との相互作用における motionese の有効性が示唆された。さらに ASD 児の母親の motionese 特性の評価点が、他の大人の motionese 特性の評価点が高い関わりかけへの児の受容反応と関連していることも明らかになった。母子の相互作用だけでなく、他者と児の相互作用においても母親の用いる motionese が重要である可能性が示された。(比較発達心理学)